



# 月報

No.448  
2017年  
9月

日本キリスト教団  
茅ヶ崎香川教会  
茅ヶ崎市香川1丁目34-35  
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

## 説教 『 真理を行う者は光の方に来る 』

ヨハネによる福音書 3章16節～21節

小河信一 牧師

16 「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

本日のテキストには、毎月の聖餐式で招きの言葉として朗読しているヨハネ福音書3:16が含まれています。これは、主イエスが、ファリサイ派に属しユダヤ人の議員であるニコデモに語りかけている場面です。

ニコデモはユダヤ教の教育を受けている身分の高い人でした。しかしながら、彼の内にある賢さや立派さのゆえに、主イエスの説かれて<sup>かたく</sup>いる新しい福音を受け入れることができませんでした。端的に言えば、ニコデモは頑<sup>かたく</sup>なで伝道しにくい人でしたが、主イエスは力強く福音の真髓を教えられました。ニコデモを神の福音の中に引き込むように、懇<sup>ねんご</sup>ろに対話を続けられました。

ヨハネ福音書3:16に代表されるように、3:16-21全体において、神が御子、イエス・キリストと共に、私たち・人間に何を為してくださったか、が明らかにされています。それと同時に、その神の御業にあずかり、救われた者として、信仰者がどのように生きるべきか、が示されています。中心点は、罪人に対する神の大いなる救いの業にあります。世がどうなっていくか、神の御業を信じる者が今、どのよ

うに変えられるのか、という大事な点を聞き逃<sup>のが</sup>してなりません。神に救われた者として、私たちの応答が求められています。

「真理を行う者は光の方に来る」（ヨハネ 3:21）と説教題に付けた箇所は、その人間の応答に当たります。神のかけがえのない救いにあずからせていただいた人間は、「真理を行う」と述べられています。「真理」は、主にイエス・キリストの言葉によってあらわされます。その言葉に耳を傾け、かつまた、それを「行いなさい」と言うのです。そのような者は、闇のはびこる世の中で、光の方に近づいて来る、そういう形で振る舞うと言うのです。

ヨハネ福音書 3:16 の中で、新しい福音に生きる人間がどうなるかについては、ひと言、「永遠の命を得る」（現在形）と記されています。確かに人が、永遠の命を得ているか否かによって、人生の歩みは大きく変わってきます。私たちはこの地上で、すでに永遠の命を得ている、それが信仰の基であり、また、それがこの世の中で天国をめざす私たちの最終目標であります。

ヨハネ福音書 3:16——

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

有名なアメイジング・グレイスの歌詞は、エフェソの信徒への手紙 2:5 と共に、ヨハネ福音書 3:16 に拠<sup>よ</sup>っているように思われます。

一番 おどろくばかりの 恵みなりき  
この身の汚れを 知れるわれに  
四番 御国<sup>みくに</sup>に着く朝 いよよ高く  
恵みの御神<sup>みかみ</sup>を たたえまつらん

アメイジング・グレイス全体の「いつも迷ってばかりで滅ぶべき身の、このわたしを救ってくださった、絶望・傲慢さ・誘惑などから解き放ってくださった、そして今、天国に生きるという希望を与えてくださった」という内容は、ヨハネ福音書 3:16 と共振しています。

また、その歌詞に出てくる ‘a wreck’ 「難破した人間」、どうしようもない人間は、「世を愛された」という「世」（ヨハネ 3:16,17,17,19）と関連しています。なぜなら、神の目から見れば、「世」の中にいるのは、程度の差こそあれ、救い難い、どうしようもない罪人だからです。「世は言<sup>ことば</sup>を認めなかった」（ヨハネ 1:10）とあるように、神に反抗し対立するのが、世の常です。しかし、神は、抵抗したり無視したりする「世」に、すなわち、この地上に主イエス・キリストを遣わされました。そして父なる神は、「世」の中の罪人を救い出すために、御子を十字架につけ、よみがえらせたのです。

父なる神と主イエス・キリストは、忍耐強く、また力強く、「世」の闇を照らしておられます（ヨハネ 1:5）。いかに神の深い愛をもって、この世のただ中から罪人を救おうとしたかが、「世」の繰り返しに表されています。

創世記 22:12——

御使いは（アブラハムに）言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげ<sup>お</sup>ることを惜しまなかつた。」

これは、イサク奉獻あるいはイサク縛り<sup>しば</sup>（創世記 22:9）と呼ばれる出来事の頂点を成す場面からの引用です。

「イサク奉獻」は、イエス・キリストの十字架に対し、一つの予型となっています。言うまでもなく、父なる神が御子を十字架につける形で、成就された救いの御業は、アブラハムがイサクを祭壇上に縛り付けた出来事をはるかに超えたものでした。主イエス・キリストは、人類の罪を贖<sup>あがな</sup>うため、十字架の死を成し遂げましたが、イサクの命が奪われることはありませんでした。

では、どこが、イサク縛り<sup>しば</sup>は、イエスの十字架と並行しているのでしょうか？

それは、「独り子」という用語と、それから言葉は違うのですが、「惜しまなかつた」（新約ではローマ 8:32 参照）と「愛した」という類語です。

父なる神が御子イエスをお与えになったのは、まさに愛の行為でした。そして、アブラハムがイサクをささげることにおいて、惜しまない心が形となってあらわされました。そこで今、「惜しまない」という観点から、「愛する」ということを想起し、常日頃の自分自身を顧みてみましょう。

「惜しみなき愛」という言葉があります。惜しみなく愛し続ける愛であります。或る種、文学的な香りのする、キリスト教的表現です。確かに、私たち・信仰者は、神と隣人を、惜しみなく愛しているのか、問われています。

我が身を振り返れば、どれほど「出し惜しみ<sup>だ お</sup>」していることか、愛のみならず、時間、金銭など、もろもろの面で……。愛をもって助けなければいけない人が、目の前にいる、実際に助ける、しかしそこで、本当に愛を注ぎきっているのかどうか……。自分の実力の範囲で、自分の許せる時間の中で、と「自分」本位に陥りがちです。その点、アブラハムはイサクをささげるといふ神への愛において、「出し惜しみ」無しでした。「独り子」をも犠牲として差し出しました。アブラハムは人間の欲得<sup>ひ</sup>に惹かれませんでした。

次に、イサクとイエスは、「独り子」であるという点を見ておきましょう。アブラハムにとってイサクは、「あなたの名を高める 祝福の源」（創世記 12:2）として、かけがえのない長子でした。アブラハムからイサクへとつながって、そこから大いなる国民が造られていくというのが、神の約束でした。

ところで、新約聖書において、「独り子をお与えになったほどに」と言われている「独り子」は、独り子・イサクとは全く異なるものです。

主イエスがニコデモに語った「独り子」というのは、神の「独り子」です。父なる神の唯一の子、すなわち、神そのものであります。従って、この神の「独り子」に代わり得る人間はいません。

罪なき、汚れなき、神の「独り子」によって、十字架と復活の出来事が起こりました。それ故に私たちは、主イエス・キリストに<sup>よ</sup>拠りて、自分の罪が潔められ、死の恐れから解放され、永遠の命を得ている、と信じることができるのです。イサク奉獻からは想像もできなかつたような、神の救いと恵みが私たちに啓示されたのです。

さてヨハネ福音書 3:16 については、2012 年 11 月 4 日の三教会合同墓前礼拝で取り上げたことがあります。その際、この章句には、①うれしいこと ②恐るべきこと ③驚くべきこと が凝集している、とお話ししました。しかも、それら三つが、①神の愛→②世の滅び→③独り子による救いと永遠の命という形で展開されています。

危機に瀕していると告げる②世の滅びは、ある意味、<sup>こわ</sup>怖いことですが、これは人々を悔い改めに導く警告でありましょう。

まず、神の愛が宣言されています。父なる神は「惜しみなき愛」をもって世を愛し抜くと言われます。しかし、このまことの喜びにあずかるために、人は自らの闇、すなわち、罪・滅び・死に向き合わねばなりません。それらが、暗闇から光のもとへと引き出されるように、まことの光によって照らされることが大切です。そのために神は、私たちがまことの光のもとに導かれるように、驚くべき御業を成し遂げられました。神の「独り子」が私たちに与えられ、<sup>ことば</sup>言として私たちの間に宿られました（ヨハネ 1:14）。私たちは今、永遠の命を得て、聖霊の力により御国をめざしています。

ところで、本日のテキストの中の「裁く」（ヨハネ 3:17,18,18）または「裁き」（同上 3:19）が気にかかるという方がおられるでしょうか。

ヨハネ福音書 3:19——

光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。

原文ではこの節の冒頭に、「それが、もう裁きになっている」または「断罪とはこれである」（カルヴァン訳）という句が置かれています。人の行いが悪いこと、あるいは闇を好むことを、神は<sup>すで</sup>既に裁いている（ヨハネ 3:18）と言います。

しかし、それと矛盾するかのようによハネ福音書 3:17 には、「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」と記されています。

ここで重要なのは、言<sup>ことば</sup>なる御子、イエス・キリストの出現・受肉において、二通りの人間に分かたれるということです。主イエスが人間に出会うことによって、確かに「裁き」が起こります（K.バルト）。神が（人がではなく！）、信じる者と信じない者とに分けられるのです。

そこで私たちは、裁きによる罰を案ずるのではなく、主イエスが私たちの間に宿り、私たちに出会ってくださるといふ恵みを、しっかりと受け止めることです。私が信じる者かどうか……それは、永遠のむかしに、神が決めておられる、信じる者を選んでおられるということにさかのぼります。

ですから、自分は光の側か、闇の側か、と疑念を抱いて焦ったりするのではなく、今はひたすら、主イエス・キリストの御言葉と御業に従う、それを受け入れるのです。主イエスご自身、「ある夜」（ヨハネ 3:2）、なお闇から抜け出せないでいるニコデモと対話し続けておられます。

本日の説教のまとめを、ヨハネ福音書 3:21 の主の御言葉に従って行いましょう。

しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。

すでに、説教題「真理を行う者は光の方に来る」に関連して、これは、神への人間の応答に当たること、そして、主イエスの語られる真理に耳を傾け、かつまたそれを実践せよとの勧めであることを、お話ししました。

付け加えれば、この節は、人間の応答を的確に描いていると同時に、先行するヨハネ福音書 3:16 の神の救いの業が、一体どのようなものであったのか、を照らし出しています。

まことの光である主イエス・キリストに救われて、私たちは感謝をもって、この世を「光の子」（ヨハネ 12:36）、一つの<sup>ともしび</sup>灯として歩んでいます。

なぜ、私たちはそうできるのか、そこを押さえておくことが肝要です。ヨハネ福音書 3:21 後半を訳し直します。

キリストの真理に根ざしている、信仰者の「もろもろの行い」が「神の中で」‘in God’「行わせられた」（受け身）ということが、明らかになるために。

人間の「数々の善き行い」は‘in God’において造られるものだ、ということが原点なのです。自分の中で、私は神に喜ばれる善き行いを為す、と理解するのは誤りです。信仰者の姿勢の第一は、‘in God’であるということです。

確かに、「真理を行う」のは、容易なことではありません。しかし、‘in God’の姿勢で、神に根ざしているならば、神は私たちを用いて、善きことを為されます。闇に取り巻かれようとも、神が、また主イエスが、私たちに業を起こしてくださいます。

そして、「その行い」が「神の中で」‘in God’「行わせられた」というのは、神の最も大いなる救いの御業に当てはまることです。

「その行い」（今度は単数形で！）は、すなわち、主の十字架と復活は、父なる神と御子キリストの「中で」、成し遂げられました。その出来事が「明らかになるために」、世に啓示されました。それは、父と子なる神の苦闘と血潮の「中で」為されました。御子を十字架につけるといふ父の苦しみ、父から見捨てられたのかという子の苦しみ……それらが、私たちは知らず顔に、目撃しながらも真に見ることなく、ただ‘in God’において全うされました。ただ‘in God’において為された、私たち・罪人のための業でした。

私たちは罪を犯さざるを得ない人間で、時に深刻に、神の裁きを恐れることがあります。しかし、私たちは神の赦しにより、「義とされた罪人」であります。義しいとされた罪人であります。神がこの私に働きかけられたことによって、私は生まれ変わったのです。ニコデモのように取っつきにくい人間、罪人も、神の御業によって、義とされるのです。

それが、神が、独り子を与えたという出来事でした。そのように、神が御力を与え続けておられることを信じ、私たちは神に栄光を帰し、善き行いを果たしていきましょう。